

環境と心性を架橋する共感共創知としてのグローバル人文学の創成

① ビジョンの概要

グローバルデジタル環境下の地球社会で「人はどう生きるべきか」という問いに答えるには、新たな個人と世界の関係性を可視化し、環境と心性の連環という未開拓の問題に対峙する必要がある。近代科学の根底にある西洋的人文知を、人と自然の共感共創知として創生するグローバル人文学により新たな科学知へ展開させ、地球社会のあり方を共に考える空間としての学術と社会のフォーラムを構築し、地球社会を共創する未来図を描く。

② ビジョンの内容

現代のグローバル化とデジタル化の急加速は、グローバルデジタル環境の出現、個人と地球社会の間の空間域の流動化、既存の価値（在来知や文明的価値）の資源化、社会の様々なアクターの地球社会の構成員化を生じさせ、人類が経験したことがないレベルで個人と地球社会を接合しようとしている。新たな個人と世界の関係性の可視化には、地域性をミクロに人間の内面性やマクロにグローバルな広がりで捉える視点を持ち、地球社会の物質循環の基層にも影響を及ぼす環境と心性の連環という人と自然の相互作用環の根源的かつ包括的理解に係る未開拓の問題に対峙する必要がある。

この問題を考察する前提の共通認識として、環境と人口をめぐる地球規模の変動では社会や経済が自然や生態と深く関係すること、グローバルデジタル環境下の社会は地球を狭くしつつも有限であること、地球社会の持続可能性と個人の幸福の追求は深く関係すること、そして今や地球環境の危機は私たちの心のあり様「心性」の危機となったことが挙げられる。そこからの問題意識として、私たちの考え方や感じ方はどこまで自然環境の影響を受けているのか、その影響は他者との付き合い方・社会の作り方・世界のあり方の点でどこまでどのように及ぶのか、自然環境が異なれば必ずと異なるのならばなぜどのように異なるのか、だとすれば地球規模の環境変動はどのような影響を与え、いかに互いの問題として理解しあえばいいのかが挙げられる。異なる心性の人のびとがいかに差異を超えて地球社会の共創のために協働できるのかという問いに答えるには、地域性をミクロに人間の内面性やマクロにグローバルな広がりで捉える視点とともに、地球社会における環境と心性の連環へのアプローチが不可欠となるが、そのためには文理共創的な視座を含む新たな学知としての方法論的視座が必要になる。

近年のコロナ禍は、地球社会における個人と共同体のつながりを根底から揺るがす現象として、個人の実践が、地域社会や国家システムを超越して地球社会へと直截に影響を与え、地球社会と個人が対峙することになった。人びとの皮膚感覚である「地球社会」の実相を捉える研究が必要であり、そのために「個人」の周囲に「社会」「地域」「世界」を設定し、「個人」を包摂する価値体系としての「文化」「文明」「世界システム」を解明してきた従来の分析モデルに代わる（図1）、環境と心性の連環モデルを構築することで（図2）、時間的にも空間的にも分野間でも複雑に連関している現代の地球社会の問題を可視化する研究枠組みが求められている。人間が個として自然との相互作用の場で創出する空間、自然資源と文化資源が接続し関与する生活空間、地域性や文明的価値が関与する社会空間やグローバル地域空間の中で、グローバルデジタル環境が生む相互作用環の様相を究明しなければならない。社会・経済系と自然・生態系の相互作用を、環境と心性の関係性に係る問題系として整理しなおすことで、情報科学や認知科学、哲学とも協働し、AIやロボット工学への応用を見据える新しい視座から、人新世において「人はどう生きるべきか」という問いに答えることが可能となる。

人間の存在自体に環境が内在化することにより無自覚な人文学を再構築することで、近代科学の根底にある西洋的人文知を、人と自然の共感共創をめぐる大きな物語として描き直すグローバル人文学に基づく科学知の創成へと繋げる。これからの人文学の果たす役割は、地球社会のあり方を共に考える空間としての学術と社

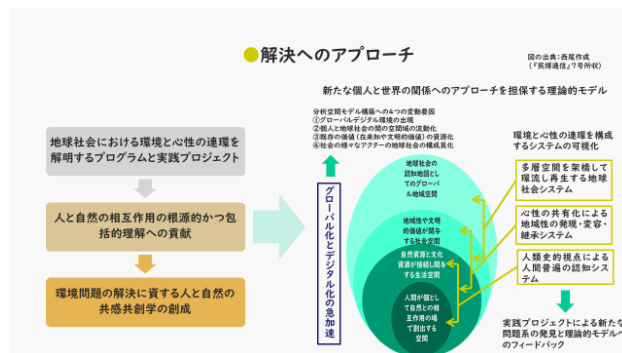


図1 問題の背景とその解決に向けた研究戦略

図2 地球社会における環境と心性の連環モデル
と具体的なプロジェクトの研究領域